

小説部門入選

アフターストーリー

花巻北高校1年 及川讃香

太陽が起き上がった午前五時四十五分。あ
くびのような雲を透かして地面を温めていく。
やがてまんべんなく光が届き始めたころ、街
の中央にある大きなデパートのサイネージが一
つのおはようございませう。四月十九日月曜日。
今日の天気は曇り時々晴れでしょう。岩手県
盛岡市に響いた。うな凜とした声が、岩手県
す。今日の『ブレイン』も正常に稼働していま
す。調整と、岩手県、茨城県、愛媛県の『核』
は要調整となり、お願ひします。『AI』の皆
さんはよろしくお願ひします。『AI』の皆
さんとはよろしくお願ひします。『AI』の皆
る。朝日どれだけ美しくも、東京の様子が映
無機物が立ち並び、中央の『ブレイン』が率
いるように佇んでいる。人を失った東京。そ
こにもはや温かみは感じられない。朝日と電
脳都市の映像の放熱音が空しくこだましてい
る。『AI』の放熱音が空しくこだましてい

「
∴
∴
」

音楽、好きなんですか？
 すみません、店を出る。心でよい春風を遮って、
 私も続けている。彼は通りに出た。春風を遮って、
 趣味を。私の。年。電機。の。店。の。婆
 か、私。は。の。年。だ。る。う。な。か。な。か、いい
 聴く。の。は。い。さ。っ。き。の。だ。る。う。な。か。な。か、いい
 り響。い。て。い。る。時。代。だ。っ。た。今。時。七。〇。年。も。前。の。曲。を
 アイ。の。「Lucas」が。作。っ。た。音。楽。が。至。る。所。か。ら。鳴
 が。好。き。な。の。だ。ら。う。か。っ。た。今。と。な。っ。て。は。楽。曲。制。作
 ぼけた。視線の先を。だ。れ。だ。っ。た。二。〇。三。〇。年。代。の。古
 し。た。視。線。の。先。を。だ。れ。だ。っ。た。二。〇。三。〇。年。代。の。古
 C D コーナーに。彼。は。目。を。向。け。た。二。〇。三。〇。年。代。の。古
 店員に。向。け。小。さ。く。頭。を。下。げ。た。∴∴「と、
 そこでも。また。同。じ。よ。う。に。∴∴した。レ。ジ。へ。行。く。
 に。勝。つ。た。か。っ。て。三。冊。の。本。を。も。っ。て。レ。ジ。へ。行。く。
 その。返。り。に。な。っ。て。計。の。長。針。が。す。ぐ。に。一。周。し。た。こ
 繰。り。返。し。て。な。っ。て。計。の。長。針。が。す。ぐ。に。一。周。し。た。こ
 ラと。ペ。ー。ジ。を。め。く。り。一。つ。戻。す。〇。繰。り。返。し。て、
 ぶ。コ。ー。ナ。ー。を。め。く。り。一。つ。戻。す。〇。繰。り。返。し。て、
 を。し。て。い。た。〇。隣。は。ど。う。も、音。楽。関。係。の。本。が。並
 無。い。肩。を。落。と。す。〇。私。の。隣。で、本。棚。と。に。ら。め。っ。こ
 る。よ。う。な。本。に。は。巡。り。合。え。な。い。日。ら。し。い。〇。私。は
 た。が。ど。う。や。ら。な。い。私。の。知。識。を。飛。び。越。え。み
 き。だ。っ。た。〇。新。た。な。出。会。い。を。求。め。色。々。眺。め。て。み

彼は特に反応を示さない。それもそうだ。いきなり知らないやせぎすのおじさんに話しかけられたところでも、無視するか警察を呼ぶかの二択だろう。でもなぜだろうか。彼とは話が合う気がした。

先ほど入り口のCD棚に興味を持たれてしまった。取りよね。あのこの本屋は三〇年代の楽曲も取りよね。はは、すまじや珍しいこと言わよ。：：はは、すみません。この年代でも、私も好きなんです。その年代で

彼は私のほうに目を向ける。いや、少しだけ視線が合っていないようにだが、興味を抱いてくれただろうか。

今はめっきり「Lucas」が主流です。私たちが流行つが若いとき『J | P O P』です。

ええ、あの曲は私も大好きです。時々恋しく聞きたくなるんです。けど、CDを手に入れない。聞きたくなるとは、もう、二度と聞けない。でよねえ。

悲しい事実を思い出して、乾いた笑みが零れる。頭の中でそのメロディを思い出し、ぽそと口ずさむ。

：：え、本当ですか？ 家に、と。

彼は思わぬ提案を差し出してきた。

：しかし、それはさすがに申し訳ないというか
けでも。でも、ああ、聴きたいな。もう一度だ

それも、そうですね。ありがとうございます。ごさいます。
お言葉に甘えさせていただけます。

ああ、私は^{かがり}箒 といいます。箒^{かがりひとし}仁志。同好の
士として、よろしくお願いしますね。

よう彼は寡黙で、あまり社交的な性格ではない
も馬が合ったが、音楽に關しては好みも考え方
花を咲かせながら、私はこの無口な男との会話に
いた。

白塗りの剥げた商店街からビル街へ移る。
キラキラとエフエクトが付きそうな建物がず
らりと並んでいる。誰もが目を惹かれてしま
うようにポップなドーナツ屋さんもオシヤ
レな雰囲気薫るカフェも、アトラクション
満載の広々とした遊園地だつてあるのに、彼

事信も家事もすべからずかえり少前までは仕
 名は『東京スカイツリー』なんとい
 みそが『東京スカイツリー』なんとい
 り立った先に『スカイツリー』なんとい
 『核』から成り立ち、その47個の細胞で
 うな名前です。ね、一つ一つの体内に比
 まるでこの日本を生物の体内に比したよ
 ような雰囲気醸し出して、立ち込める暗雲の
 R P G に出る魔王に立ち込める暗雲の
 彼の沈黙が続く。真空で、私は口を開いた。
 ……あれは、私が名前を付けたんですよ。
 くと酷く暗く重い箱の景色を眺めていた。遠
 んといもなく外エレベーターが押す。彼はう
 らいな屋外エレベーターがあつた。空へと
 つなぐかと思えば、少し先には着た。空
 まったかと思えば、少し先には着た。空
 まで、年の私には少しづつは、ふと立ち止
 た。想的像以上に彼に足取りがせわしいも
 う。目的も分からず、ただ私には付いてい
 ヤホンが、外界の音を消し去つて、いるの
 は脇目も振らずに、うくらすと歩いた。耳

それが今となつては、「アイ」がすべてこなせ
 てしまふのです。から、人工知能つてやつあ恐
 ろしいものです。おや、知つていましたか。やっぱりあなたは
 物好きですよ。ね。ふふ、私と、同じ匂いがす
 る。

まあまあ、そんな怒らないでくださいよ。現
 代では「義務」なんぞ掲げる教育機関もなく
 なつたじやないです。あなたレベルの知識
 を身につけている人なんて、そうそういない
 んですよ。

リニア式電車の一番端の車両に乗つて、空
 を降りる。「核」は私たちから少し遠ざ
 かつていた。暗雲は未だ消えそうにない。
 それでも私には空気の汚れも重さも感じられ
 なかった。彼は視線を「核」に向けたまま、
 こほつと一つ咳をした。「核」に向けたまま、

気が付けば私は彼の家の前に立っていた。
 よくあるように整った行書で「B七階の一番
 手前が表札には光っている。佐久間」の
 文字がぼしつと光っている。
 ……おじやまします。

へえ、たくさんありますね。あれも、ああ、
 この曲まで持つているのは相当大変じゃあありませんでし
 かに入れるのは相当大変じゃあありませんでし
 たか。

久しぶりにこんな目にすると、やはり、心
 が躍ってしまいませんか。

代佐久間という男の家の本棚には二〇〇年
 べから二〇〇〇年まで、私の時代をそのま
 私にいた時代をそのま映したかのような本
 棚に、青い春を想わずにはいらなかつた。
 しかし、私の過去すべてが美しいとい
 幻想到過ぎない。彼は、すたすたの部屋
 に、部屋に入ると、彼は、すたすたの部屋
 に向け、思わず息を呑んでしまった。
 ピンカには、ディスプレイボード、ヘッド
 ン、マイク、MIDIキーボード、ヘッド
 ；と、様々な電子機器が並び、
 いた。その電子機器が並び、
 作った一冊のノットがある。そこには、
 作予定表と、そう文字だけが一番上に、
 書かれています。そこには、
 乱雑になつていく、ひらがなで埋ま
 ；
 ；
 そうか、音楽を、作りた
 いんです。

ツつ続ら | う 静いそ の暇 な ひ 造 て 訪
 ド確さ鍵 ト よ 次 か と ば 一 さ ぐ た 作 い ね そ
 フか れ 盤 を う 第 な 思 で 角 え り す に つ た ° ち
 オめ た の 見 な 佐 熱 う 黙 つ 1 さ け て 机 え ° 訪
 ン る M 映 る き な 久 間 一 番 守 K ない た ° っ 気
 で よ I D 画 し ° は 本 近 私 っ に 滾 気 大 丈 一 心 不 乱 と は な く っ た ° ち
 隔 う D I 面 に て 付 箋 で は な 見 何 た ° い 平 凡 乱 と は な く っ た ° ち
 て に 押 キ し 食 置 箋 で は な 見 何 た ° い 平 凡 乱 と は な く っ た ° ち
 ら し ー 食 置 箋 で は な 見 何 た ° い 平 凡 乱 と は な く っ た ° ち
 れ し ー 食 置 箋 で は な 見 何 た ° い 平 凡 乱 と は な く っ た ° ち
 た て ー 食 置 箋 で は な 見 何 た ° い 平 凡 乱 と は な く っ た ° ち
 先 い ー 食 置 箋 で は な 見 何 た ° い 平 凡 乱 と は な く っ た ° ち
 で た ° の て 手 し パ い た か ない て ° あ た シ ョ ン だ ° ち
 は ° き 鍵 盤 を ° 彼 は な が ノ か の た ° ち
 稚 つ 盤 を ° 彼 は な が ノ か の た ° ち
 拙 と 一 つ は な が ノ か の た ° ち
 な そ の つ は な が ノ か の た ° ち
 ド の つ は な が ノ か の た ° ち
 レ へ 一 接 が ノ か の た ° ち

伝 く ず 箋 ら 机 箱
 う べ か 彼 を 一 の か 佐
 ° ら に の 左 冊 上 ら 久
 れ 上 瞳 手 を に と 間
 た が は 手 に 置 り は
 指 っ 揺 構 に い だ 先
 先 て れ え 取 た し ほ
 の い て て り ° どの 買
 熱 る い ペ ー そ 部 買
 が よ た ー ボ れ 屋 っ
 ° う ° ジ ー か の て
 右 だ そ を ル ら 照 いた
 手 っ れ 開 ペ 書 明 た U
 の た で く ° の 店 に か S
 ボ ° い ° を 右 紙 ざ B
 ー 静 て 手 袋 し メ
 ル か 口 手 の の て モ
 ペ に 角 に の 中 か リ
 を を わ 付 か ら を

葉だ彼の詩^{うた}は着飾ったところのない、純粹な言
 しな主張もない。彼の理想をそのままた、遠回
 したようにな、火傷しそのほど情熱的なメツ
 セシ^ジ。ここ最近、歌詞だけはノン・トに書き綴つ
 が多かつたが、歌詞だけはノン・トに書き綴つ

ま：
 っ：
 て：歌詞か。ああ、すまない。勝手に見てし
 く、力強い言葉が並べられていた。そこには優し
 ずその手の先に視線を動かす。そこには思わ
 た佐久間の右手がふつと止まった。私は思わ
 しばらくして、ノートにペンを走らせてい

ミが響いて、いるのだらう。
 未だ、彼の口角は上がつていた。揺れてい
 た瞳も、いつの間にか真つすぐ光を捉えるよ
 うになつた。その光は、今このなかつた光だ。
 と同年代の若者が宿すところの私の瞳に宿して
 そしてそれは、若いころの私の瞳に宿して
 た光と同じものだ。音が、やがて初々しいメロ
 デイを形作つていく。彼の心にある音がその
 ままソコンを、通して。彼の心にある音がその
 りと、ゆっくると、時間をかけて、一秒を織り
 重ねていく姿に、私は自然と笑みを浮かべた。
 。

ていたようなのだ。そのノトは二重線と消しの跡
で真つ黒になつていたので、佐久間の
中に、不自然に空いた行が目に入る。ま
は右手からペンを放したそのまゝ、一分
までもつても、い。彼は動き出す、三秒、
分経つてもつても、彼はそのまゝとしない、五
悩んでゐるか。そうか。：：自分の想いを
誰かに伝えること。ほど。：：このさ
な。誤解。それによくない、不快。強
ま。わな。い。う。に。感。じ。取。つ。て。も。ら。え。る。よ。う。に。し。な。け
く、相手に。感じ。取。つ。て。も。ら。え。る。よ。う。に。し。な。け
れば、い。け。な。い。[。]取。つ。て。も。ら。え。る。よ。う。に。し。な。け
今では誰かと話すなんて言う機会も、そ
い。も。ん。じ。や。な。い。だ。ろ。う。誰。か。と。は。一
でも。り。た。い。だ。け。や。る。誰。か。と。協。力。し。な。く。は。も
そ。の。力。は。全。て。『ア。イ。』が。補。つ。て。く。れ。る。[。]は。は
あ、寂しい時代になつたものだ。あ。
行く。詰。つ。た。と。き。は。寝。る。に。か。ぎ。る。よ。君、し。ば
ら。く。ま。と。も。に。寝。て。な。い。だ。ろ。う。[。]
が。こ。こ。に。狂。つ。て。い。る。と。は。佐。久。間。の。生。活。に。生。き。ず。ム
て。も。分。か。つ。た。あ。ら。ず。に。あ。る。時。は。一。秒。だ。つ。て。
ら。立。ち。上。が。ら。ぬ。時。は。ベ。ッ。ト。か。ら。一。秒。だ。つ。て。
い。た。ま。に。は。あ。ら。ず。に。あ。る。時。は。ベ。ッ。ト。か。ら。一。秒。だ。つ。て。
の。中。は。常。に。す。つ。か。ら。か。ん。だ。し。て、彼。の。机。に。は。エ
を。抜。け。出。す。こ。と。な。く。寝。息。を。立。て、彼。の。机。に。は。エ

ナジードリンクが常備されている。

ただ、それでも、無茶をするなどいえば私の
 若いたころを否定する、何に成る。私が研究職
 だった頃、何度失敗し、何度徹夜を重ね、そ
 の度に自分を卑下した。何か。徹夜を重ね、そ
 し、か、し、自分、葛藤も。確かに喜びがあつた。楽
 しさも憂いも。好きなこと、踏まえて幸せ
 な時間だつた。好き、な、こと、に、熱、中、で、き、る、時、間
 を、存、分、に、味、わ、え、た、時、間、だ、つ、た。熱、中、で、き、る、時、間
 志、と、い、う、人、間、を、作、る、に、必、用、不、可、欠、な、時、間、と、い
 つ、て、も、過、言、で、は、な、い。必、用、不、可、欠、な、時、間、と、い
 せ、佐、久、間、の、瞳、は、ど、れ、だ、け、の、身、を、や、つ、れ、さ
 に、日、に、強、く、な、つ、て、い、る。こ、の、世、界、に、住、む、ほ、と
 ん、ど、の、人、間、が、持、た、な、い、光、を、こ、の、世、界、に、住、む、ほ、と
 いる。私、は、その、光、を、消、し、ま、わ、ぬ、よ、う、に、
 た、だ、見、守、る、こ、と、し、か、で、き、な、い。
 死、に、そ、う、に、な、る、ま、で、は、別、に、構、わ、な、い。た、だ、
 死、ぬ、な、よ。

そう言葉を残して、彼の家を後にする。

日、夜、道、を、L、E、D、ラ、イ、ト、の、明、か、り、が、照、ら、す。今
 こ、れ、は、私、の、毎、晩、の、ル、ー、テ、ィ、ン、だ。研、究、職、を
 し、て、い、た、こ、ろ、は、ほ、と、ん、ど、机、か、ら、離、れ、な、か、つ、た。

と光岡て　　ラもく　　っ岡て笑
 建もをらラウ未　　エて市いたい声
 っなか　　ラウンだ　　レ　　は　　は　　を
 て　　いた　　ン　　反　　は　　は　　こ　　ぼ　　け
 いた　　た　　ジ　　応　　ま　　た　　う　　し　　て
 だ　　ど　　に　　は　　は　　な　　と　　の　　浮　　遊
 の　　っ　　は　　は　　な　　と　　の　　清　　掃　　感
 私　　闇　　息　　を　　と　　り　　は　　こ　　の　　街　　を　　一　　望　　で　　き　　る
 は　　で　　そ　　の　　中　　に　　一　　か　　所　　だ　　け　　、　　盛
 ひ　　き　　た　　立　　方　　体　　が　　、　　ソ　　フ　　ア　　に　　腰
 と　　り　　窓　　際　　の　　ソ　　フ　　ア　　に　　腰

遅くまで、大変だな。
 の筋が「核」に「アイ」に向けて伸びていった。
 うに「この「アイ」の首元から帽子をかぶって
 ユルトをかぶせたら、掃除員らしい頭にはおまん丸のよ
 「屋外エレベーターに乗ろうとすると、清掃
 今夜は、あそこに行こうか。

ものだから、まともに運動なんてできやいな
 ると、今日の目的を求めわふと歩いてい
 今晩は、あそこに行こうか。

一なアの善行さ観ジて げて能げ探よはト器
 つどプうの善為え点ヤ研私 げてはどい究りやフと小
 のとロえ形が人ではン究は い失どい心コがオ隣さい
 作い | 言で極工はあハはしそ のた。重 ねな がのじわじわ
 品うチ葉、ぎて能はあま一般的。も たら じわじわ
 に多では絵などせるといしかの とう可 能性をつ
 詰数のなく媒、言葉、アメプロ しかし、こ
 めの媒、言葉、アメプロ しかし、こ
 込の媒、言葉、アメプロ しかし、こ
 まの媒、言葉、アメプロ しかし、こ
 れの媒、言葉、アメプロ しかし、こ
 ての媒、言葉、アメプロ しかし、こ
 いるの媒、言葉、アメプロ しかし、こ
 。プロの媒、言葉、アメプロ しかし、こ
 しロデイ、楽器、器
 かしチ、が、こ

はル先わ を
 私サにらこ
 のイあ 下
 罪ネる ず
 の | 「 過
 残ジ核の 去
 骸に「こ 静
 だ映もと かな
 っる、を ひ
 た「毎考 と透
 。ブレの よ 明
 インうま 息
 「にうい 吸
 も、の今 ° つ
 すデ視 だ
 べジ線 っ
 てタの 変

私はその間に思ひ浮かべたりと振り返った後、
 詩は、心がよもなつていた。言葉だけ心にま
 で響かせる生きた見方。歌詞のワンフレーズ
 だけで泣いたり、共感したり、新しい発見を
 出すことも、ノースタルジメクナイ甘酸っぱさを
 思い出すことも、ある。その心に残る響かせ
 聴こえることがなくなる。そして心にまで響かせる。

感嘆の声を上げるばかりで、誰も違和感の正
 体を教えずに、曲が、欠陥品に聴こえるのがや
 らなく、生まれた。結局、社員に公表するのを
 せたくして、私は「Lucas」を公表するのをため
 れ、世に出ること。結局、社員に公表するのを
 思えるもの。絶賛されて、複雑極まりなかつ
 た。私はここで初めて、「人工知能には心がない
 い」という人工知能に気が付いたのだ。学習さ
 せて、それは、補えない。欠陥品は、瞬間、
 うと、補えない。欠陥品は、瞬間、
 作品とは、呼ばない。それだけに、瞬間、
 目の前が真っ暗になつて、意識が遠のいた。真
 に人の心を動かす作品は、意識が遠のいた。真
 でなければ、未来永劫不可能だ。その心も、それ
 工知能では、未来永劫不可能だ。その心も、それ

よりいつも通り佐久間の家を訪れると、いつも
 霧も気が変わって家の訪れると、いつも

機物よりも一人一人もまた、一人一人もまた、
 燦々として燃えている。いつか、その太陽は無
 きる。路地裏の隅まで行き渡る。太陽は静か
 いき、路地裏の隅まで行き渡る。太陽は静か
 を温める。その光はガラスを介して反射して
 今日、太陽はゆっくりと起き上がり、地面
 燦々として燃えている。いつか、その太陽は無

「ア、アイ、飲み込み込まれ、学びも仕事もある。佐久間はきつとそんな歌を作るだろう。た、だ己のやりたことしかやらずに怒り。と生きるように。一度、人間を風刺した。う、そんな人間を今一度、人と共してほし。願、い。寡黙な皮の内側に滾って。い、それら。感、情を、彼は何の恥ずかしげもなくすべ。め、込む。だろ。う。私、は。その姿を見ていた。彼、の。全、身。全、霊。の。言、葉。で。こ、の。世、界。を。塗、り。替、え、て。ほ、し。い。あ、い。にく、私、は。もう。こ、の。世、界。に。実、体。を。持、ち。合、わ、せ、て。は。い。な。い。私、の。声。が。彼、に。届、く。こ、と。は。な。い。が、彼の声は世界中に届かせることがで

す私去　　ないと時歌B使こたへ久　　る　　っののを　　不めとフ納がをに
 べとっ終いたも々はメつえ°置間瞬空て波ス数　　不安て声オ得和重向
 て同たわよ°ある不自然辞し°それでもツ°彼ほど足の先まれの部屋に溜ま
 をじ°りのう上手°然にも上上手°に叫ぶよ°なサ°ビ°程はの
 詰よはな想いとれでも言`と葉だ歌けで声は心遅°音程こ
 めう放いいが`の葉だ歌けで声は心遅°音程こ
 込な表心動`の彼の言`と葉だ歌けで声は心遅°音程こ
 んだ情し動`の彼の言`と葉だ歌けで声は心遅°音程こ
 のをての連続°はこもつ容しまる響こ
 だしいた°はこもつ容しまる響こ
 ろてた°はこもつ容しまる響こ
 うい°た佐°久間にしていき°れ
 °た佐°久間にしていき°れ
 彼°久間にしていき°れ
 のこも間にしていき°れ
 死のも間にしていき°れ
 に三分た°ぎ°れ響こ
 物分に、ぎ°れ響こ
 狂に、ぎ°れ響こ

増し、午前四時十五分。太陽のあくびはいつにも
 映った。「アイ」は、雨予報を淡々と伝えてい
 る。佐久間の家に向かうと、彼はちよどU S
 Bメモリのコンピュターに挿さうとしていた
 ところだ。保存する。そのままだ。慎重な持
 ちで、ピクセルワークしたり。そのままだ。慎
 重な最終確認で、マウスを動かしたり。目を
 閉じ、深い呼吸を一回、二回と映る。佐久間
 は、目を閉じ、深い呼吸を一回、二回と映る。
 え、と。画面が切り替わり、「sakuma」のアカ
 ぱった。画面が切り替わり、「sakuma」のアカ

いの音楽は歪ながら、心揺らす。このひたむき
 さは、きつと。佐久間、そう、確信して。私、
 きつと。佐久間、そう、確信して。私、
 から、歌い終えた。佐久間は、一通りの作業を
 終えて、照明にかざし、モリは、その光を反射し、握りしめ
 る。U S Bメモリの間は、その光を反射し、握りしめ
 と輝いた。佐久間の肩から、力が抜け、
 そのまま。机の上には、突っ伏した。満足そうに
 顔、
 で眠る彼の手に、
 れて、いる。手には、
 おやすみ。君の声は、
 きっと誰かに届く。

その文章を目で追った。何度か
 カウソウは、何回も何回も何回も
 た。この動画は運営『アイ』より削除されまし
 ・、以下の動画は運営『アイ』より削除されまし
 ドラインに反する不適切な表現がみられまし
 「sakuma」様がこの度、コミニテイガイ
 画面には小さなタブが表示された。から、
 ツクする。すると、読み込みを終えてから、
 てしまっただけ。彼は訝しげに更新ボタンをクリ
 は、ただ、デイスプレイを二人で凝視する。から
 開いた。佐久間の瞳には光が見えた。そこから
 回数のカウン트가一つ増える。ぱつと目を見
 回数のカウン트가一つ増える。ぱつと目を見

ウントと、幼児が描いたような太陽のサムネ
 イルが映った。今までせき止めていたような息を
 佐久間は、左手にUSBメモリを持ってた
 ふっくと吐き、左手にUSBメモリを持ってた
 だ握りしめていた。それはない。不安か、願いか、
 は、たまたま両方かもし。それはない。不安か、願いか、
 そっとな手を添え、その時を待つ。私には彼の右手に
 上には、手を添え、その時を待つ。私には彼の右手に
 お守りのように置いてある。太陽と同じ絵が、

い熱なでか左た
 く情か、た手姿
 °がつ拾んに勢
 、たいと握が
 ゆ°上音り、
 つこげをし椅
 くのよ立め子
 り1うてらの
 、Lとてれ背
 ゆDし床ても
 つKたにいた
 くにが落たれ
 り滾、ちUに
 とっ掴たS預
 冷てむ°Bけ
 たいこ私メら
 くたとはモれ
 な静はかリて
 つかでがが
 てなきん、く。